

雄はサキを追い返すことができなくなった。だが、もし行雄の想像どおりだったとしたら、サキよりも危機的な状況にいるのは、サキが「アキちゃん」と呼んだあのよく泣く赤ん坊ではないだろうか。

深夜にサキがやって来るのが何回か重なったとき、行雄は我慢できなくなり、膝をついてサキと目の高さを合わせて訊いた。

「妹……、アキちゃん？ アキちゃんは大丈夫なの？」

するとサキはこつくりと頷いて答えた。

「うん。まだ、まだ大丈夫」

そうしてからサキは、行雄の目をしっかりと見返しながら言った。

「でも、もし、もし大丈夫じゃなくなっちゃったら、おにいちゃんが助けたげてくれる？」

五歳ばかりの子どもとは思えないほど強い意志のこもったその眼の光に気圧されながら、行雄は知らぬ間に頷いていた。

「約束だよ」

念を押すように言われ、行雄は答えた。

「うん、約束する」

辛夷の花も盛りの時期を終えた。

この数週間、サキはほとんど行雄の部屋に入り浸っているといってもいいような状態だ。弟妹を持たずにひとりっ子同然で育ったせいもあって、行雄は昔から小さな子が苦手だったはずなのだが、そんな自分が毎日のように五歳の子どもと一緒に過ごしていることを不思議に思う。

そのうちに行雄は、サキの絵を描きはじめた。着ているものははじめて会ったあの日と同じ、着たきり傘の灰色の吊りスカートと薄汚れたブラウスだったが、サキは実際、ときどき目を瞞るほど可憐らしい表情を見せた。

はじめは、ベニヤ合板張りの安い折り畳み机に向かって一心不乱に例のわけの判らない絵を描いているサキの表情にちよつと心を動かされて、たわむれに一枚描いてみようと思ふに木炭を手にとってみたに過ぎなかった。あっという間に一枚を描き終えて、サキに見せてやった。

サキは長いこと行雄の描いた絵を見つめていた。黙りこくったまま微動だにしなくなってしまうサキを見て、行雄は絵が気に入らなかったのかと心配になり、サキの顔を覗きこんでみた。

サキは、泣いていた。泣きながら笑って、絵を小さな胸に抱きしめた。

そんなサキの反応になぜか胸が詰まるような思いがして、行雄はもう一枚サキを描いた。